

浄

monthly
JŌDO

土
10

October 2003





昭和29年1月号



昭和30年1月号



昭和31年1月号



昭和31年6月号



昭和32年1月号



昭和33年1月号



昭和33年2月号



昭和33年3月号



昭和33年4月号



昭和33年5月号



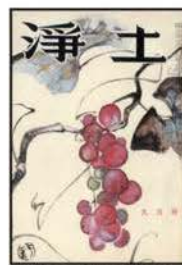
昭和33年6月号



昭和33年7月号



昭和33年8月号



昭和33年9月号



昭和33年10号



昭和33年11号

浄土

2003/10月号 目次

人間に宗教はなぜ必要か③	ひろさちや	2
会いたい人 富士真奈美さん③	関 容子	12
浄土・九品仏句会	村田恭子	20
表紙のことば	永井健策	25
梵字④	真野龍海	26
バリアフリー考	白木 力	28
代替医療という世界⑥	井上朝雄	30
響流十方	袖山榮輝	32
新連載 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	36
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ『さっちゃんはネッ』	かまちよしろう	47
編集後記		48



表紙題字=浄土門主 中村康隆祝下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

様
デー・マップ主催「みとら」セミナーより

人間に 宗教はなぜ 必要か

第三回

最終回

宗教評論家

ひろさちや

それでは、人間の価値、人生の価値というのは何なのか。これも二種類あると思っていただきたい。娑婆の価値と彼岸の価値ですね。この二種類の価値があるのだということですから。ここをしつかり押さえておいてください。

人間の価値、人生の価値といった場合に、人間の価値には彼岸における人間の価値と娑婆における人間の価値があるということです。そして、人生における価値というのも、彼岸における人生の価値と娑婆における人生の価値の二種類の価値があるのだということに、気がついてほしいと思います。

そして、このことに気がつくならば、すぐわかることは、私たちは娑婆の価値で人間の価値、人生の価値を見ているんじゃないかということですね。そして、娑婆の価値とは何かといったら、商品価値だということになりますね。

人間が商品にされてしまっているわけです。皆さんのお子さんに一流大学を卒業させると商品価値が高まるわけですね。そういう学歴で商品価値が高まって、企業が高い値段で買ってくれるので、そのための教育になっているわけですね。労働者は労働力として自分を企業に売り込んでいるわけですが、それは資本主義社会だからしょうがないと思われるかもしれません。確かに資本主義社会の本質はそこにあるわけです。

しかし、この資本主義社会でも、例えば日本の資本主義社会とイギリス、フランス、アメリカの資本主義社会というのはそれぞれ大分違うのです。イギリスなどでは、労働者が労働力という商品にされてしまうことに、とても神経質になっています。人間が商品価値にされてしまったとき、人間が商品になったら「奴隷」なんです。商品として売買される

人間というのは奴隷ですよ。

実はこの奴隷の問題について経済学者が指摘しているんですが、要するに奴隷を売買していたヨーロッパとかアメリカ社会とかのように、奴隷制があった社会においては、労働者が今、奴隷的に扱われることに対して、ものすごく神経を尖らせているんです。だから、労働者の自由というものをどれだけ確保するか、奴隷じゃないんだということをどれだけ確保できるかに関して、血みどろになって格闘しているんです。しかし、日本みたいな社会では奴隷制がなかったので、奴隷に対する罪悪感というものを、日本人は知らないわけです。だから日本人はすぐ簡単に奴隷になってしまうということになるわけです。

そういうことで、日本においては人間を商品化しているわけです。ですから企業に人間が雇ってもらったとき、ある年齢まではその人間の商品価値はどんどん高まっています。あるところから先は商品価値がどんどん低下していきます。頂点までいくとそうなりますね。つまり、定年退職前になると、商品価値がどんどん下がっていきます。要するにゴミになっていくわけです。

そして、定年退職したらどうなりますか。「粗大ゴミ」になるんですね。「濡れ落ち葉」などとも言われてしまうんですね。

人間が商品にされてしまっているのは、娑婆の価値観で計るからです。だからお金のかせぎのいい人がいい商品ということになります。高く売れる商品だからです。

しかし労働価値を売り込んで買ってもらっているけれども、自分が商品になっているということについて、屈辱感というものを常に持ち続けて、「俺は屈辱的な人間なんだ」と

いう自覚があれば、会社に対して対抗できるんですね。ところがその自覚がないから、つまり奴隷になっているから、いつまでも会社に付き合っていくことになるのです。こんな会社は刑務所と同じですよ。ですから、自分を奴隷にしているような会社から、アメリカ人だったら、五時がきたらパツと、クモの子を散らすように、みんな帰ってしまいます。

しかし、日本人は、「会社人間」と言われる人が多くて、土曜日も日曜日も出ていく。一体何をやっているのかと思いますよね。

そうすると、彼岸の価値というのは何かと言えば、その反対になりますね。彼岸の価値で見た人間の価値、人生の価値というのは何かといえば、簡単なんです。「何でもいい」ということです。「どんな人でもいいんだ」というのが佛さまの価値なんです。

ですから勉強ができる子は勉強ができることで価値がある。しかし、勉強ができない子は勉強ができないということそのものに価値があるんです。そして、どれも同じ価値なんだ。全く同じ価値なんだということですね。

もちろん同じ価値といっても、同じという定義は難しいですから、確かにある人とある人とは価値の上下があります。しかし、一番価値の多い人で一兆六十九円です。価値の低い人というのは一兆二十七円です。これぐらいの差だと思っています。

価値の差がないわけではありません。まったく同じだと言ったら、かえっておかしなことになるでしょうかもしれませんので、「あの人の価値は一兆六十九円、もう一人の人の価値は一兆二十七円」ということなんです。どれだけ違いますか。「これは四十二円の差がある」と、その差にこだわっている人がいれば、「アホか」と思いますよね。

このように佛さまの目でみたら、価値がちょっと低い人もいるでしょう。ちょっと価値の高い人もいるわけですよ。しかし、これぐらいの差があるだけなんです。商品価値になると、この「一兆」が消えてしまうわけですよ。「お前は六十九円で、お前は二十七円」となってしまう。そうなると、みんな一生懸命六十九円になろうとするわけです。

それでは何故宗教の彼岸の価値では「何でもいい」といえるかと言いますと、今の例でも一兆六十九円と一兆二十七円だったら、どちらでもいいでしょう。皆さんはこれでもまだ四十二円の差に執着しますか。それはよほど計算のできない人で、バカな人ということになりますね。ですから、「何だっという」と、おおらかになれるでしょう。

しかし、「どうしてそういうことになるんだ。娑婆の価値ではよくわかるが、佛さまの価値ではそれが正しいということを立てることができるのか」と聞かれるわけですよ。私の話を聞いて、皆さんは多分、どこかで疑問を持ったままになっていると思いますね。

「お前が言うことはよくわかるけれども、それが正しいということを、どこで証明出来るのか」ということが、皆さんの疑問です。疑問があることはつきり認識していなくても、心の中で疑問に思っているでしょうが、そのところが大事なんです。

実は、これは、私たちにとって、証明はできないことなんです。そこが宗教なんです。証明できるというのが科学なんです。科学がやっているのは娑婆の価値なんです。一生懸命、娑婆の価値について優劣を論じるということとはできるのです。いくらでも証明できます。いろいろな事例をあげてきて、証明できるわけです。

しかし、彼岸の価値があるんだということは、証明の問題ではないのです。心からそ

れを信じるより他はないものだと思ってください。これが「信」ということです。なるほど、佛さまの目で見れば、みんな何でもいいんだ。どの子だって佛の子だ」ということは、信じるほかはないということなんです。そこが宗教の本質なんです。

逆に言えば、宗教を持つていない人、信じられない人というのは、こっち側の価値観しか持てないわけです。そのため、物事をいろいろ考えて、悩むわけです。しかし、彼岸のほうを信じさせてもらえば、後は楽ですね。

それでは、「どうしたら信じられますか」となるわけです。だが、それは信じようとして信じられるものではありません。努力して信じることもできません。向こうの方から信じさせてもらえることなんです。どうして信仰を持てるかわからない。ある日突然出てくるようなものです。ストンとそこに行くわけです。佛さまのほうから信じさせてくださるのです。

ですから、「信じられません」と皆さんが思っている、**「信じられない」ということだけを信じてください。**そして、**「まだ私にはそこまで信じられないんですが」といっても、そういうことだということだけはわかると思います。**

それが、本当に信じさせてもらえるかどうかというのは、努力するだけではできませんから、持つていればいいんです。いつかは信じさせてもらえます。ということは、別に生きている間というだけとは限りません。死んだ後でも信じさせてもらえます。

そこで大事なことは、人生の価値というものが、人間の価値でも同じですが、「何でもいい」ということです。しかし、人生というものを娑婆の世界の価値観で見れば、人生とい

うのは生きている間だけのことになります。死んでしまえば、娑婆の世界は商品価値ですから、死んだらゴミになります。「人は死んだらゴミになる」という本を書いた人がいますが、ばかなことを書いていると思うんです。

死んだらゴミになるというのが娑婆の価値観です。商品価値なんですからそうなるんですが、廃物利用しようといって、臓器移植が出てくるわけです。使えるゴミは使いましよう。リサイクル運動というものの一つが臓器移植なんですね。

そういうふうには人生の価値というのを生きているときだけで計るんです。生きていることが人生だと思っていますが、とんでもありません。それこそが宗教の本質で、宗教というのは、死後の世界というものを置いています。

死後の世界というのは、佛教では極楽浄土だとかいいます。キリスト教だと、天の国、神の国、天国という言い方をします。あるいは、地獄というのも死後の世界ですね。

宗教によって呼び方が違いますが、そういうものがあるとかないとかの問題ではなく、「生きている間だけで人間の存在を考えるな」というのが宗教なんです。

その反対に、生きている間だけで全部考えるというのが、娑婆の側の考え方なんですね。そうすると、生きている間がすべてですから、できるだけ儲けたくなってしまうわけです。そして、私の人生の意味を、生きている間だけの価値としてここまで生きてきた。しかし、後はもう生きている値打ちがないかと思ってしまうと、自殺したくなるんですね。というのは、生きている間だけが人生だと思う。人間存在だと思っているからです。そのところに根本的な誤りがあるということに気がついてほしいわけです。

だから、「死んだ後もあなたは残っているんだよ」ということを信じられたとき、楽になれるんですよ。つまり、生きているうちがすべてだと思ってしまうと、生きている間にやらないといけないことがいっぱい出てくるわけです。そして、あれもやりたい、これもうやりたいということになってしまふんです。そうすると、やりたいことがなくなってしまう人が、また困るんですね。「もう生きている値打ちがない」などと思ってしまうんですね。

私たちは死んだ後、浄土教においては「お浄土に往く」と信じられています。そして、お浄土に往くときにはお土産を持っていくのです。何を持っていくかといったら、財産などは持っていきません。何も物は持っていけないわけです。お浄土に往って、親しい人に会うときに何を持っていくかというと、美しい思い出だと思うんです。これをお浄土にお土産として持っていく。この美しい思い出しか持つていくものはないわけですね。

ただし、この美しい思い出というのを勘違いしないでほしいんです。「美しい」というのは、この世の中で美しいという、娑婆の価値観での「美しい」というものではありません。お浄土に持っていったら、「こういうお土産を持ってきた」と先にお浄土に往っている人に報告します。じつは、私は父と別れてもう五十何年か経っています。六十年近くになります。「六十年の間にどこかでフグ料理を食べて、おいしかった」ということを、言っても、少しも美しいとは思わない。美しい景色を見てきたといっても、お浄土のほうがもつと美しいので、そういう自慢話じゃないんです。この美しい思い出というのは何かとよくよく考えてみますと、涙を流したとき、「辛かったね」というとき、あれがお浄土に行っ

とき、美しい思い出になると思うんです。もつとも、いい思い出もいかもしれません。お姑さんにいびられた。自殺したいほど泣かされた。あるとき困ったよ、というようなことも、美しいということになるでしょうね。

単に、こつち側でいう、娑婆の価値観で「美しい」と思わないでほしいと思います。お浄土の佛さまの価値観で見てほしいと思います。そうすると、娑婆の世界で私たちが苦労した、例えば、学校で子どもがいじめられて、「お前、辛かっただろうね」というようなことが、美しい思い出なんですよ。

苦しみをしっかり耐えていく。そして、それを佛さまの世界にお土産に持っていけるんだと思えばいいんです。ただ、急いでいく必要はありません。呼んでくださったときに行けばいいんです。そして、そのときに美しい思い出を持っていくつもりで、毎日を生きてほしいと思うんです。

それが結局人生の価値になるわけですね。生きている間だけではなく、お浄土に往って初めて、そのときに本物の価値が出てくるんだということです。そこに宗教の本質的な意味があるんです。

生きている間だけで「得した。損した。いい思い出をした」ということは、薄っぺらなものです。もつともっと大事なことがあります。お浄土に往って、思い出話として「何を語ることができるか」という観点から、もう一度人生を見直してみる。それが宗教の意味だと理解していただきたいと思います。

人間になぜ宗教が必要なのか。宗教のない人間は結局、商品価値でしか、娑婆の価値で

しかものを見られない。そうすると、エコノミックアニマルになってしまふんです。あれは人間ではなく、アニマルなんですよ。

私は、「動物プラス宗教」ということで人間というものを定義しています。つまり、人間とは何かというとき、「宗教を持った動物」なんだということです。動物が宗教を持ったとき初めて、人間になれるのです。この方程式を少し移項して考えるならば、人間から宗教を引くと、動物にしかならないわけです。まさに今、日本人は宗教を持っていないから、エコノミックアニマル、動物なんですね。

だから「人間に宗教が必要か」という問いはおかしいのです。宗教を持っているから人間なんです。そういう結論を導き出して、今日の話を終わりにさせていただきます。

連 載

会いたい人
関 容子



富士真奈美
さん
③

撮影／タカオカ邦彦

眞奈美さんが二十代半ばの頃。歌舞伎座の萬屋錦之介（当時は中村錦之助）公演『織田信長』に出演したことがあった。

「いつか姉に言われて思い出したんだけど、昼の部と夜の部の合間があるでしょ。あなた覺だけはずして真っ白な顔のままタクシーに乗って、さる作家の仕事場で口述筆記手伝ってたじゃない……って。そんな他人ごと、よく憶えてるもんだと思うわよ（笑）」

普通は汗で崩れた化粧は全部落して、夜の部の顔は作り直すものなのに、その時間も惜しんで恋愛中の彼の役に立つと思うのがきつと嬉しかったのだろう。眞奈美さんはつくす女だ。

「でもその彼が肝臓を悪くして入院してるときに素敵なハンサムボーイに出会って、雷の一撃。そっちがよくなっちゃったんだから、あんまり当てにならないわね」

さる作家は数年後、時代小説を書き大流行作家となった。

ここで、眞奈美さんの随筆で読んだ少女時代の情景が浮かぶ。三島にいたころ、村祭の夜に俄雨に遭い、顔を白塗りにしたどこかの若い衆が七つか八つの眞奈美さんを自分の傘に入れて送ってくれた。別れ際に男は少女の顔をじっと見て、「おみやあはいまに男泣かせになるぜ」と笑ったという。

眞奈美さんにとってこの言葉が初めての「殺し文句」で、でも若い衆の予想は「大ハズレ」とうまくそらして書いているが、決してそんなことはない。

眞奈美さんが、好きになったそのハンサムボーイについては、岸田今日子さんがあるときこんなことを言っていた。

「彼ってアポロンのようなの……って眞奈美がうつとりしてたわよ。その子とある日車で日生劇場の前を通ったときに、あつ、アンナ・カレーニナだわ、って眩いたら、アポロンが、え？ その人どこの人？ なにしてる人？ って（笑）。眞奈美は文学少女だった

から、そんなこと知らないような人がかえって新鮮に見えたんでしょね」

しかし「アポロン」との恋も、何か月かで終ってしまった。

真奈美さんがやがて結婚することになる相手と出会ったのは、テレビドラマ『奈奈と母』のときだった。

「ゾラの『居酒屋』と『女優ナナ』を彼が翻案したドラマで、私は映画『居酒屋』のマリ・シエルがやったジェルベーズに当る役。ナナの役は加賀まりこさん」

真奈美さんは一時劇団四季の客員だったことがあって、『永遠の処女』（ジロドゥ）では、真奈美さん、影万里江、加賀まりこが三姉妹の役を演じている。

「そのひとが私のために書いてくれた中で一番いい役は『七人の刑事』の中の夫を殺された新妻の役。若山富三郎さんに、あれはよかったよ、って褒められたの。女が復讐するた

めに犯人に自分を殺させる、という設定が面白かったわね」

彼はテレビドラマ『おはなはん』のモデルと言われる女性の縁戚だった。

「はじめて『おはなはん』に会ったとき、初めまして、って挨拶したら、パッと家の中に消えちゃって、手早く着替えて、きれいにお化粧して現われたの。口紅も鮮やかに。あとで聞いたら出身が徳島で、あっちでは別嬪の素顔よりおかめの厚化粧、って言うんですって。人に対する礼儀なんですよ。このときが八十いくつかで、九十九歳で亡くなったのね。ずいぶん長寿。よくひとりでトランプ占いをしていました。ちよつと吉行めぐりさんみたいな可愛い人だったわ。都知事選があつて、美濃部さんに石原さんが敗れたときなんか、わたしは慎太郎さんじゃ、若くていい男がい……って言ってた（笑）」

知り合ってから結婚まで、六年もの期間があつた。花登筐のテレビドラマ『細うで繁盛記』

「細うで繁盛記」より



「切られ与三郎」ラストシーン。市川雷蔵さんと



が大ヒットして、眞奈美さん人気がブレークし、超多忙になってしまったからだった。

「私は熱川の旅館を切り回してる気丈な娘。ピン底眼鏡かけた意地悪な小姑の役で、私の地で行ける伊豆弁が面白かったらしいのよ。その旅館の無気力な兄のところへ大阪船場から美しいお嫁さんが来て、それが新珠三千代さん。番頭や板さんや仲居さんを引き連れて、古ぼけた旅館を建て直そうとするんだけど、私が一人頑張って、兄嫁をいびるの（笑）。足かけ五年も続いたかしらね」

あのいびり役の印象が世間によほど強烈だったせいか、今でもタクシーに乗ったりすると「細うで繁盛記、観てました」と運転者さんから声が掛かる。私も何度かそこに居合せたことがある。

「結婚したのは三十五のとき。それまでの仕事を総てやめて、十年間普通の生活したの。今思うと、私の友人たちが男のために女優を捨てることなんて絶対しないと思うけど、私

なんか、この人、と思うと大恋愛じゃなくてもそれが当然のように、仕事の話を全部断わってドップリ家庭に入ったの。揉めことが嫌いというか、計算の立たない性格というか……。翌年、女の子が生まれると、子供を背負って、家事全般をこなして、添い寝して、二歳半までオッパイやって倅せだった。毎日のように相手のお客様をもてなして、私のほうはいっさい遮断。実家に帰ったのも十年間のうちに二回くらい。それで家計費は全部私が受け持った」

えっ？　とここでびっくりした。そんな「結婚」であるのだろうか。

「だって、お金くださいなんて言えないじゃない？　自分の貯金があったし、一日で終るCMくらいには出てたから当り前だと思っただわ。当時の私は、デパートに行ってもまず男物の売場を見る。男の人を着せ替え人形みたいにしてあげたくなっちゃうの。自分なんかいつも同じ物着てて構わなかった。そのうち

だんだん溝ができて、ここで立ち直らないと全員、水没しちゃうと思って、陸に上ったの。つまり男の人って女のウエストと同じで、ゆるめが楽だと思うとどんどんこんなものだと思うのよ。それは女のほうもいけないわね。ちゃんと引き締めていかないと。とにかく私はいつも相手の顔色を見て、気を使っばかりいたの」

恋愛沙汰はそれにて打ち止め。でもまわりに気を使う性格は現在も変わらないという。

「今は犬に気を使ってる（笑）。仕事が忙しいとき知り合いに犬を預けると、なんてわがままなチワワなの？ って言われちゃう。みんな私がそうしちゃうのね」

真奈美さんの俳句の腕前は有名だが、その俳号は**衾去**（さんきょ）。これは「女は三十になったらもうお褥滑り」というのでふざけてつけたものだという。

また、女優休業のころにはエッセイや短編

小説をよく書いた。

「亭主が留守で、子供を寝かしつけて台所でお酒飲みながら書きなぐってたわね。全部そこにはき出すの。私にとってはエッセイのほうが虚構で、小説はまず作り物の枠をこしらえておけばどんどこに本当の自分が入って行けるから、ストレス解消に役立つの。楽しかったわ。水割り呑みながら、どんどん筆が進んで（笑）。でも今は晴らすべき鬱憤が何にもなくなったらしくて、小説が書けなくなっただわね。だって誰にも気兼ねなく好きな野球のテレビを見て、夜中の三時だろうと四時だろうとシラシラ明けにお風呂に入って、幸せだなあ、って自由を満喫しているんですもの」

真奈美さんの鬱積時代の産物とも言える短編集『ろくでなし』は、もうすぐ文春文庫として出る予定。

「私ね、書いてた当時、編集者に言われたことがあるの、小説書くには人がよすぎる、っ

て……。でもまた書きたい」

好人物が作家向きでないかどうかは別として、たしかに真奈美さんはいいい人だ。別れた相手の最初の奥さんとも、心が通じていたのがその証拠。

「そう、女の人とはみんな仲よし（笑）。前の奥さんはドイツの人で、男の子がいるの。おじいちゃんおばあちゃんが世話をしてくれて、同じマンションで暮したこともあったのよ。だから私の娘の里鶴は、その異母兄に勉強を見てもらったりもしていたの。最近ママが危篤という知らせが入って、お兄ちゃんはまだ動転しちゃってたんだけど、里鶴がつきそってはるばるドイツ郊外まで出かけて行ったの。二人が着く二時間前に亡くなったというから残念だったけれど、でもあの里鶴がしっかりとって、とてもよくやってくれた、ってお兄ちゃんに感激されちゃってね、フーン……と思ったわよ」

一時、里鶴さんの登校拒否で悩んでいた真

奈美さんを知っているだけに、その感慨がよくわかる。

近ごろ全国各地で時折開かれる仲よし三女優（岸田今日子、吉行和子、富士真奈美）のトークの会が評判だ。第二部は文字通り三人の「乱れ咲き」トークだが、その前の第一部は今日子さんが自作の怖いお話の朗読。和子さんが短い一人芝居。真奈美さんは緋のもんぺ姿でハモニカを吹きながら登場し、思い出を語る。話が母の死に及んでも暗くならず、花やかなのは、「男泣かせ」の三島の少女に戻っているせい、その場を切り取る鮮かな俳句のせい……

「うちのまわりは田んぼだったの。典型的な田園風景。夕方、木のでっぺんに一つだけ残してある柿の実が夕陽に映えるころ、ごはんよー、人さらいが出るわよー、なんていう母の声がするんです。蠅（ハエ）ってカナカナ蟬（セミ）のことでしょ。母がミシンをカタカタ踏んで私たち



の洋服を縫ってくれた音とダブるのよ」

細き目の女案山子^{かがし}は母に似る

柿の実や遠く子と呼ぶ母の声

鯛やどこかで母の踏むミシン

「六人も子を生んで育てて、自分を空しゅうして、昔の女の人はそれで当り前だと思つたのかもしれないけれど、亡くなつてお骨になつたときに初めて、有難うございました、つて手を合せたの。白くて小ぢやな貝がらみたいな母のお骨に」

木枯しや灼かれて薄き喉仏

九品仙

探訪句会

村田恭子

冷夏がうそのような残暑の晴天となった八月二十二日、九体の阿弥陀如来を安置していることで有名な浄土宗の名刹東京・世田谷区の九品仏浄真寺で、句会が行われました。酒と冗談をこよなく愛する俳句の会「月天」の同人たちを中心に、『浄土』誌からも、長谷川岱潤さん、平井泰代子さん、伊藤幸枝さん、村田洋一さんが参加され、東急大井町線九品仏駅に集まってきた総勢十余名は、じっとしていても汗の浮いてくるような午後の日差しの中を、ゆつくりと浄真寺へ向かいました。

駅から二分、蟬時雨の降りしきる並木道を抜けると、銀杏と樅の巨木がつくる緑陰ゆたかな境内が目の前に広がります。真夏の住宅街にとつぜん出現した涼しい静寂、まるでオアシスのような風情に、流れ落ちる汗がすうっと引いていくような心地が、なんとも不思議な感覚です。

今回の句会会場となる開山堂の脇をひとまらず通り過ぎ、二層構造の立派な仁王門へ。中

空となつてゐる左右の門柱に古色ゆかしい阿吽の仁王像がおさめられ、上層には二十五体の菩薩が安置されているというのが、
『どこから上層に上がるんでしょうか』

二階があると聞けば、どうしても階段の場所が気になるのが人情というもの。しばらく仁王門の周囲をぐるぐると探索するうち、門柱の中に入る扉があり、仁王像の後ろの暗がり階段があることを発見しました。扉はもちろん施錠されており、三年に一度の「お面被り」の行事のときにしか決して見る事ができないとなると、よけいに、二十五体の菩薩への想像は膨らみます。

その仁王門をくぐると、いよいよ本日メインイベント、駅名の由来ともなっている「九品仏」との対面です。

本堂から眺めると境内を挟んで西の方向、つまり「浄土」を表す方角に三つのお堂があり、普通は開けてもらえないお堂を開けていただいて、ぼんやりと観ておきますと、その

扉の上に、「上品上生」「中品下生」などと書かれた額が掲げられています。どうやらこれが「九品仏」と深いつながりを持つ言葉なのだろうと推測はできるのですが……。

「げひん、ちゅうなま？」

「下品中生」という掲額をなんと読むのか思案していた私たちの後ろで、声が聞こえました。知る人ぞ知るロック系雑誌の名編集長、吾郎さんの声です。

「なんだか出来の悪いビールみたいね」

と絶妙の合いの手を入れるのは、吾郎さんの奥様、和楽器奏者の栞さん。

「いや、あれは、げひんちゅうなまではなく、げぼんちゅうしょう、と読むのです」

案内をして下さっていた浄真寺の青年僧の言葉に、一同から爆笑が起きました。

お坊さんの説明によりますと、この三つのお堂は「上品」（じょうぼん）「中品」（ちゅうぼん）「下品」（げぼん）という三段階を表していて、中にはさらに「上生」（じょうし

よう）「中生」（ちゅうしょう）「下生」（げしよう）と三種類に分けられた、三体ずつの阿弥陀如来が安置されているのです。この九体の阿弥陀如来こそが「九品仏」であり、「下品中生」とは、「下品」の「中生」に位する阿弥陀如来を指す言葉だったのです。

さまざまな人間をすべて平等に救済するという意味の込められたこの九品仏は、一体一体が微妙に違う表情を持つうえ、それぞれに異なる手の形（印の結び方）をしています。「下品下生はオレの性（サガ）」という七五調のフレーズが、著作50冊を越すフリーライターの、裕さんの口からすらりと出てきたのをはじめ、参加者の興味はこの九種類の段階名に集中し、絶好の句材ともなりました。

上品の扉が開く夏の果て

栞

蟬落ちて下品下生の印結び

吾郎

蝉しぐれ我を下品と導かんと

泰代子

さつき言葉だけ書きましたが、浄真寺には「おめんかぶり」という有名な行事があります。本堂と上品のお堂の間に木の橋を掛け渡し、菩薩の面をかぶった人々が、まるで此岸と彼岸を行き来するように往来するというのです。想像するだけで心躍るこの幻想的な光景をぜひ見たいものと思いましたが、三年に一度だけ、八月に行われる行事で、次回は平成十七年になるとのこと。

本堂正面に坐す金色の大きなお釈迦様と対面したあと、奥の部屋で「おめんかぶり」に使う菩薩の面を見せていただきました。黄金色に輝く面は木製で、前後からきつちりと頭部を包みこむフルフェイスの形をしています。見たとたんに、

「うわあ、これはたまらないな」

という声が自然と上がりました。夏の暑い盛りにかぶるとなると、表面の顔は菩薩でも、面の裏はおそらく、灼熱の地獄のような暑さにちがいません。

凡人列伝おめんかぶりの汗が垂れ 裕

撫でたところが快癒するという撫で仏の頭を撫でて、もはや手遅れ気味の無駄な祈願をしたり、「五劫のすりきれ」の説明を聞きながら薬師仏に眺めいたりして、おのおの本堂の中をしばらく見学したあと、開山堂へ移り、中庭を望む座敷で、のどやかな雰囲気句会が始まりました。

髻びんず頭も盧を撫でる裏堂秋暑し 烏鷺坊
 蟬しぐれ忌日ばかりの深庇 振り子
 地獄絵が一幅寺の夏座敷 仁
 悪人も老いも若きも残暑かな 白々
 今だけとあわて鳴きたる秋の蟬 岱潤
 薄明かりして仏のおわす蟬時雨 紫野

無礼講となることもしばしばの、破天荒な「月天」の定例句会とは少し勝手が違って神

妙になったのは、浄真寺という「座」の力で
しょうか、いやむしろこの日だからこそその味
を持つ、バラエティに富んだ句が出てきます。

ブリクラに残る姿や秋の風 白々

野の仏拝みなんだか泥鰯汁 裕

八朔や庇の奥にカワイピアノ 振り子

と、それぞれの個性を見せてくれたのは、
意外にチャームिंगな一面を持つ早稲田大学
文学部教授の白々さんと、とぼけた持ち味の
裕さん、いつも独特の感性で句会を盛り上げ
てくれる振り子さん。

が、この日の主役となったのは、「月天」
句会の長老であり、人生の大先輩でもある仁
さんでした。

汗ふいて畜生道に少し入る 仁

仏みな素足でおわす初秋かな 仁

短夜の赤蠟燭の涙かな 仁

空蟬の中は暮色とおもいきり 仁

と、今日一日のさまざまな風景や心境を織
り込んだ佳句を連発、参加者の選をほぼ一人
占めして、風格ある古刹・浄真寺での句会に
ふさわしい幕切れとなりました。

句会が果てたあとは、夕暮れにはまだ少し
間がある九品仏の街を抜けて自由が丘の中華
料理店「項好」まで、ぶらぶらとほどよい散
策タイムを楽しみました。「項好」には浄真
寺のご住職、清水英碩さんにもご同席をいた
だいて、浄真寺の歴史など興味深い話題で座
は盛り上がりおいしい料理に箸も進んで、な
んとも贅沢な心持ちの会食となりました。

ふだんあまり行かないところに行つていろ
いろなものを見、さまざまな人と出会えるこ
とが、吟行句会で得ることのできる楽しみの
ひとつです。今回の九品仏浄真寺での句会は、
まさにこうした「句会」の楽しみを十二分に
満たしてくれる、極上の体験となりました。

間

心象書道

永井健策

人間て不思議なもので、その文字を見ていると、ただそれだけで好きになってしまうこともあるんですね。

その一つが「間」と書いて「ま」と読む言葉。何となく、この文字と読み方が好きになってしまったようです。

「間」は全ての場面においてとても重要。その上具体的に表現するのが難しい。

そんな間の中にも、ほっとする間があって良いかなと感じています。

(ながいけんさく)

昭和20年群馬県生まれ。中央大学法学部卒業後、読売広告社に入社。企画セクションに配属され16年在籍した後、自動販売機製造メーカーのサンデンに転職。販売企画の仕事を16年続け、平成11年に独立。会社を設立し、新規事業に取り組んでいる。趣味で始めた「心象書道」が趣味の世界を超え、展覧会を開くまでになっている。

連載『梵字』④

観音菩薩・

勢至菩薩を

阿弥陀三尊仏（刷毛書き）

彌陀

阿

勢至菩薩

観音菩薩

彌 陀

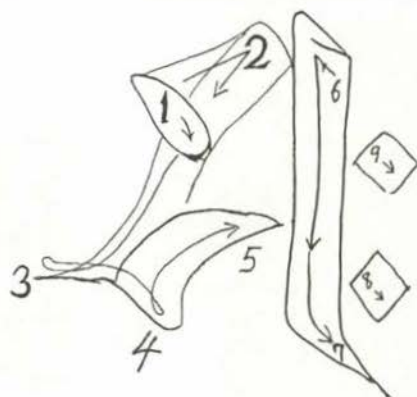
表す文字

種字

真野龍海

阿弥陀仏の左脇に立つておられる観音菩薩の種子は「サ^{し。じ}」_{sa}、右脇の勢至菩薩は「サク^{さく}」_{sa}で書き表します。

観音菩薩は、梵語では、アバローキターイーシュヴァラ（avalokita観—Isvara音）_{Isvara自在}、または、アバローキターイーシュワラ（avalokita観—Isvara音）とあります。このように解釈に二つほどあって、観自在菩薩とも、観音とも訳されています。般若心経などでは観自在菩



勢至菩薩刷毛書き

薩です。浄土宗のお経では、観世音菩薩とありますが、(avalokita観)の中のlokaをloka「世」の意味を含めたか、音を「世の音」というように解釈したのかもしれませんが。

大勢至菩薩は、マハー スターナブラーバタ (mahā, 大—sthanam 勢力—drapita) です。

いずれにせよ、両方とも同じようなシユの、サsがあるので、両菩薩を表すのに、サsの字が使われたのではないのでしょうか。これは私だけの感想ですが。

梵字は、毛筆書きと刷毛書きとあります。今回は刷毛書きで示しました。書き方は、「(勢至菩薩刷毛書き)の図」の、矢印方向に筆をお進めください。まず、①は、「あ点」といって、梵字を書く作法として、とにかく、一筆、図のように置きます。力を入れ直して筆の先を、そのまま放さないで、右に引きますと、梵字らしい上端の線になります。②で左下に

引きもどして、③左上方に筆先が細く跳ね上がるようにして、筆先を放さないで折り返し、右下に④に筆を止め、⑤筆をやや持ち上げながら上端を右に放す。⑥では筆を持ち直して、下方向から筆を入れて、下へ真つ直ぐ下げ、左の④の線あたり⑦で、右下四十五度くらいで引きながら筆をじよじよに持ち上げると、きれいな筆先となる。このように、各梵字の右下の線が同じように揃うときれいです。私だけの感想ですが、この梵字サは、英語の筆記体大文字のSに似ているように思いますが、いかがでしょうか。勢至菩薩は右に、止声といわれる点「H」を書きます。

以上で、阿弥陀仏の「キリク」、観音菩薩の「サ」、勢至菩薩の「サク」で、彌陀三尊が完成です。

連載

バリアフリー考

第3回（全6回予定）

文／**白木カ** バリアフリーデザイン研究会事務局長
一級建築士／インテリアプランナー

写真／**丸山カ** バリアフリーデザイン研究会会員
歩行者・電車空間デザイナー

（おもて）表 と 裏（うら）



何事にも表（おもて）と裏（うら）がある。一般的に表と裏は全く違ったもののはずだ。40年位前までは、レコードでもドーナツ盤と言ってA面とB面があった。もちろんA面がメジャー、B面がサブだった。最近これはなくなった。今の音楽はほとんどがCD（コンパクトディスク）だから？A面B面はない。そりや当たり前。ここまではジョークだ。

何でもそうだが、主流があるから反主流があったりする。しかしこれでは対立しか生まれない。実は、裏技にこそ隠れつげがあり、生きる糧がある。表技は誰しも持っている。それではつまらない、だから裏技はないか奔走する。こどもたちが夢中になるコンピュータゲームなどいい例だ。今の時代、裏も表もなくなったと言ったほうが的確かもしれない。昔は、裏は本当に裏家業で死ぬまで報われなかった。しかし最近、むしろ裏技にこ

そスポットが当てられている。もはや表とか裏と言う差別感は無くなった。表の妙味、裏の極意。知れば知るほどにバリアフリーだ。境目はない。今の時代は、個性を本格的に生み出せる、まともな時代になった。

谷崎潤一郎が記した「陰翳礼賛」いかにも日本的だが、（陰）裏の世界の良さをことさらに引き出している。表とか裏とか言う言葉にこだわっている限り世界は拡がらない。表しか知らない人は人生の半分しか楽しめない。表にも裏にも真理があるからだ。ものの見方次第で楽しみは、2倍にも3倍にもなる。確かに裏という表現がよくない。競争原理を働かせることで質をあげるといふ幻想があるが、だから白黒をつけたいのだ。勝者の論理には惑わされたいようにしたい。人生は一度。バリアフリーを見極める力が必要だ。

代替医療の代表選手 「ホメオパシー」

CAMUNET/代替医療利用者ネットワーク

井上朝雄

何となく熱っぽいな、と感じて体温計で測ってみた、案の定体温は三十八度を超えている——そんなときの、わたしたちの多くがとる対処法は「解熱剤を服用する」のが一般的かと思います。

つまり、発熱に対してその熱を押さえようとするわけです。あるいは高血圧には降圧剤を用います。そのような「症状とは反対の作用をもたらすもの」によって治療する療法を「アロパシー」、日本語で「逆症療法」とい、その典型が近代西洋医学です。

一方、発熱に対して、健康な人が服用すれば発熱してしまう作用を持つ薬を用いる療法があります。つまり、「症状と同じもの」で治療するわけで、この療法を「ホメ

オパシー」、日本語では「同種療法」「同類療法」などと訳されています。

ホメオパシーとは文字どおり「その症状に似たもの」という意味で、十九世紀初期にドイツ人の医師、ザムエル・ハーネマンによって創案された治療体系ですが、このホメオパシーが今回タイトルにつけたように「代替医療の代表選手」というのは、二つ理由があります。

ひとつは、欧米はもとよりインド、南米などに広く普及しており、その普及度から、今日でも代替医療の筆頭にあげられていることですが、それだけではなく、ホメオパシー自体が、近代医学が台頭し、欧米で主流を占めつつあった時代に、それに対抗して生み出されたものでも

あるからです。その証拠に、その症状とは別のものを意味するギリシャ語から、「アロパシー」ということばをつくったのもハーネマン自身なのです。

ホメオパシーの基本原理は二つ。

ひとつは「類似の法則」。これは前述のように、「健康な人に与えると特定の症状を起こす物質には、それと類似した症状を示す病者を治す作用がある」というものです。ホメオパシーに用いられる薬剤は三千種類以上あり、その約七〇％が植物、その他鉱物、動物などほとんどが自然界に存在するものからつくられます。

二つ目は「無限小の法則」。それら薬剤は「正しく希釈されれば、投与量は少なければ少ないほど病気に對するからだの生命力を効果的に引き出す」とされています。驚くのはその希釈の度合いが尋常でないことで、葉草の搾り汁一に対して蒸留水とアルコールによる溶剤九の割合でまず希釈、それをさらに十分の一に希釈、さらに十分の一に……というプロセスが何回も繰り返され、希釈されればされるほど効果が強力になるとされています。最終的にはもとの葉草の分子がひとつもなくなるほどに希釈したものが最強になる、という理論で、これだけでも科学の常識を越えています。

しかし、この特異な療法が今日なお広く世界中で行な

われ、代替医療の代表選手と言われるのは、実際それが非常に有効だった、ということが臨床的に実証されてきたからにほかなりません。

日本の近代医学は、明治になって多くの日本人がドイツに留学し、学び、持ち帰ってきたところから本格化しますが、当然ながら当時のドイツにはアロパシーとともにホメオパシーもあつたはずで、アメリカでは一八〇〇年代前半に早くも輸入されているのです。だから、森鷗外だって北里柴三郎だって、少なくともその存在を知っていたと思われます。なのに、なぜかアロパシーだけが輸入され、ホメオパシーのほうは無視されてしまいました。

しかし、近代医学が行き詰まりを見せ始めた近年になって、日本でもようやくホメオパシーへの関心が高まってきました。当初は民間レベルで導入が始まりましたが、二〇〇〇年になって医師をメンバーとする「日本ホメオパシー医学会」（会長・帯津良一博士）が結成され、英国の専門機関と提携しての研修・研究が始まる一方、帯津博士の帯津三敬病院（埼玉県川越市）をはじめ、同医学界所属の医師たちにより、ホメオパシー治療が少しずつ始まっています。面白いのはペットの治療に用いている動物病院が増えていることで、むしろペットたちのほうがヒト様より一足早く体験しているようです。

「それは私には戻ってこないだろう」と、善を軽んずるな。しずくがおちれば、やがて水瓶もみたされる。少しずつではあっても賢者は積み上げた善に満たされるのである。

釈尊『ダンマパダ』 一二三偈

*『ダンマパダ』：パーリ語の詩文で綴られた仏典。漢訳『法句経』に相当する。『スッタニパータ』とともに初期の仏教教団の教えを伝え、多くの仏教徒が釈尊の言葉として親しんできた。

花火と草刈り

私が住む信州は、じつは花火が盛んなところである。

しかも、特に盛んな時期が秋。九月、十月、長野市内善光寺周辺では各町内の神社で秋祭りが繰り広げられ、いずれも奉納であるが、境内での仕掛け花火あり、山から尺玉の打ち上げありと、それぞれ趣向を凝らして、長野の秋は随分と賑やかなのである。

それぞれの神社の氏子たちは「おらが町の花火」とばかりに熱心に取り組んでいる。それだけに、この時期、花火の話題には気を付けねばならない。

いつだったか、隣町の寺で行事があり手伝いに行った時のこと。後席の反省会でその寺の役員さんと懇意になり、「そろそろ花火の時期ですね」と話を向けた。神社の役員でもあるその方が「もう随分と準備も進んでいる」とおっしゃるので、「S神社の花火は素晴らしいですね」と言葉を返した。すると血相を変えられ、「おらがK神社の方が一分間に使う火薬量や花火代はまさっている」と言われてしまった。隣同士のS社とK社は花火ではライバル関係。褒める花火を間違えてしまったのだ。

ま、そのくらい熱の入る花火であるから用意も周到である。さすがに花火そのものは専門の業者にお任せなのだろうが、花火を仕掛ける木々の枝払いやら寄付集めは、毎日の仕事の合間を縫いながらのことだから、何かとご苦勞が絶えないことだろう。

しかし、花火大会で何が一番大切な準備作業であるかというと、草刈りであるという。打ち上げだろうと、仕掛けだろうと、花火であるからには火の粉が舞い落ちる。燃えるものの上に落ちれば当然火が上がり、火事になる。だから、境内であれ、山であれ、火の粉が落ちそうなどでは下草を刈り、枯れ葉、枯れ枝を片付けてはじめて、安心して花火を打ち上げることができるのである。

およそ花火とは結びつかない地味で目立たぬ作業であるけれども、決して軽んずることのできない作業なのである。「おらが町の花火は」と血相を変えた役員さんも、毎日、草刈りをしながら夜空に映える鮮やかな花火の姿を楽しみにしていたのだろう。

これまで火薬を配合して点火するばかりが花火だと思っていたが、草刈りや

寄付集めという「縁」があつてはじめて花火は花火たり得ていたのである。

人生にはどれほど努力を重ねていようとみなかなか結果が出ず、どうも報われた気がしないという時がある。そういう時はえてして、他人のせいにしたたり、世の中のせいにしがちになり、「努力してもしなくても結局同じじゃないか」と斜に構えてみたりもする。気持ちは分からないでもないが、そこは「善を軽んずるな」である。

草刈りも慣れないうちは、つい「花火の出来映えとは関係ないだろう」と思ひもするだろう。しかし氏子さんたちは決して怠らない。草刈りこそ花火を成功させる秘訣と思つておられるのだ。

情報過多の現代。性急に結果ばかりが求められがちだが、たった一夜の花火にも、草刈りという地道な努力が込められている。

善を軽んずるな。

努力が無駄に思える時こそ思い出してほしい教えである。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

法然上人を
めぐる人々

一の谷序章

◆第一回◆

石丸晶子

絵・石川忠夫

(一)

元暦元年（一一八四）二月五日の朝、播磨の国一の谷の平家の大本陣では、どっかりと床几に腰を下ろした総大将の平宗盛が、側らに控える叔父の経盛や教盛たちとともに、蜜柑を食べていた。

早春の明るい日射しの下におかれた大本陣の周囲には、幔幕が張りめぐらされ、その幔幕の外には幾千幾万ともしれぬ平家の赤旗が、



あたかも真つ赤な火焰を空に流した風情で、海からの早春の風にあおられ、たなびいている。旗の周囲にはよろい鎧、兜、かぶとに身をかためた何万という平家の軍勢が、やがて始まる戦いにそなえてたむろしている筈だった。

八万余にもふくれあがった大軍勢を、大手、搦め手、一の谷などに振りわけたのはその前日の二月四日である。

さらにその前日二月三日には、平家は資盛、有盛、忠房、そして清経や師盛といった小松

殿一家に對し、三千の兵をつけて三草山に送り出していた。

一門の人々が軍評の末、大手四万余騎の布陣する先として選定したのは生田の森である。

一門が大手の大將軍として指名したのは、總大將宗盛の弟新中納言知盛で、副將軍に指名されたのは、宗盛の叔父重衡であつた。

他方、搦め手三万余騎が布陣する先として選定されたのは一の谷の西側である。こちらの大將軍に指名されたのは、宗盛の甥の左馬守行盛。そして副將軍に指名されたのは同じく宗盛の叔父の薩摩守忠度であつた。

大本陣に立て籠る宗盛をはじめとする一門の人々に見送られ、大手の軍勢も搦め手の軍勢も、早春の光のなかを、きのう、いっせいに赤旗をなびかせながら、それぞれの陣地向かつていった。

今日、二月五日は西ふさがり、明日は陰陽

道で外出を忌む道虛日（どうこにち）だ。

東から攻めてくる源氏に對して、平家は西に布陣しており、したがって今日と明日、源氏の大群が西にいる平家を攻めてくるとは思えない。戦いが始まるのは、まずまちがいない明後日であらう。

今日と明日、戦さがないと思うと、宗盛はすでに布陣して鎧、兜を帶した身とはいえ、何となくほっとしたような、くつろいだ気分になつていた。詩歌管弦を愛好してやまぬ公達の多い平家一門のなかにあつて、彼だけは歌も詠めず、管弦のたしなみもない、取り得といえばお人よしなところだけといった、大どかな性格の男なのである。



「のう、修理大夫殿」

と蜜柑を食べる手を休めて、宗盛はかたわら

でしきりに蜜柑の汁をすすっている経盛をかえりみた。

「戦いのさなかとはいえ、入道殿（清盛）の忌日供養も無事に営み申した。去年の秋、木曾義仲の軍勢に追われて、都落ちして以来のことをふり返れば、ともかく福原（現在の神戸市一帯の地名）までは帰ってまいりましたことが、夢ともうつつとも思われますのう」

きのう二月四日は、三年前に熱病で死去した清盛の祥月命日だったのである。

これが都落ちなどしていなかったならば、どんなにか盛大に莊嚴に、忌日の供養がとりおこなわれ、造寺造仏の供養もなされたことであろう。

だが、現在は先陣のさなかである。都にいたときのことを思えば、淋しいとも質素とも極まりない供養ではあったが、それでも現在の平家の本拠地屋島から安徳天皇が御母建礼

門院とともに行幸され、昔を偲んで人々が流す涙の中、中納言の律師忠快、阿奢梨祐円、法勝寺執行能円、二位の僧都全真など、都落ちについてきた一門の僧侶たちの読経の声が、高く低く流れたのであった。

今、宗盛たちが食べている蜜柑も、そのとき、高杯（たかつき）に盛って仏前にそなたものである。

「去年の秋、福原の港を出て九州まで漂うてまいりましたときには、生きた心地もありませなんだが」

と宗盛はつづけた。

「まことに内大臣殿のいわれる通りじゃ」

と経盛は唇からこぼれた蜜柑の汁を、ざっと手で押しぬぐいながら答えた。

「われらも今、そのことを考えておりました。都を出て、この福原の港からどこゆくあてでなく、船出したあの日のことを思い出して



R. Ishikawa

おりました」

経盛は嫡子の経正とともに都では歌人として名の通った平家の一人であった。青葉の笛で名高い、あの敦盛の父でもある。

「福原では、修理殿をはじめ薩摩守殿など歌を詠まれましたのう。われらはその道には暗うて、どう詠まれたか、しかとは覚えておりませぬが、詠まれたお歌をきいて、心が悲しみにくれましたことだけはよう覚えております」宗盛はいった。

「まことに、都をあとにしましたときの心細きこと、今日の比ではありませなんだ」

経盛はそういうと目を閉じ、低くつぶやくように、去年の秋、都落ちの途中、福原の港で詠じた歌一種を吟じた。

ふるさとを 焼け野の原と かへり見て
末もけぶりの 波路をぞゆく

長年住みなれた都の館を焼け野の原にして

その煙をふり返りふり返り見ながら、前途もやはり煙のような雲に閉ざされた、海の旅路をゆくのであろうか。

二度、くり返し低く吟じているうちに、経盛の目から涙がしたたり落ちた。茫々としてゆく手の見えぬ前途の不安を、話し詠んだそのときの心を、ありありと思い出したのである。

(三)

「そうじゃ、いよいよ福原の港から主上（安徳天皇）を奉じて船出するときに、御嫡子経正殿もお歌を詠まれましたな」それまで黙して宗盛と経盛の話をきいていた敦盛が口をはさんだ。

「あのお歌は経正殿ひとりのお気持ではなく、われら一門すべての者の心を詠んだお歌でござった。忘れはいたしませぬぞ」

教盛はそういうと、やはり目を閉じ、経正の歌を口ずさんだ。

行幸する 末も都とおもへども

なほなぐさまぬ 波のうへかな

帝が行幸されるそのゆく先がどこであろうと、行幸されるそこが都なのだとわかつてはいるけれども、それでもやはり、心なぐさまぬ波の上の住まいであるよ。

一度、二度、口ずさむうちに声がふるえ、教盛の頬にも一筋の涙がゆつくりと流れ落ちていった。

「修理殿御一家はみな揃うてみやびな方々じや。経正殿は歌を詠まれるだけでなく、琵琶もたしなわれる。末のお子の敦盛殿も、年はお若うても笛の名手であられましたのう」

ふたたび蜜柑を口に運びながら、教盛が口ずさむ経正の歌をきいていた宗盛がいった。そして

「おお、そういえば」

と宗盛はことばをつづけて、

「経正殿は、たしか御室から青山とか名のついた琵琶を預っておられたものではありませぬか。青山はたいへんな名器と聞きおよんでおりましたが、あれはどうなされた。都落ちにも持ってこられてか」

「いや、あの青山は名器中の名器。仁明天皇のみ代に、唐より遣唐使が持ちきたった琵琶にございます」

と経盛は、

「あまりの名器にございますれば、都落ちに同道して、万が一にも田舎の塵になるようなことがあれば取り返しがききませぬ。そこで西海に赴きますとき、御室にお返しに参上したと経正は申しております」

(つづく)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●友

〔特選〕

桑の実や友と駈けたる風の土手

片桐てい女

昔は養蚕が盛んだったし、桑畑はあちこちに見られたが、今は珍しくなってしまった。だからこの実は、自生に返ったものだろう。土手を歩くとこの辺を走り回ったり、桑の実を食べたことなどがよみがえってくる。

〔佳作〕

五線譜に友のメモあと雛の歌

河合富美枝

泣き友の来る盆道をきよめけり

中島富士子

夏木立メル友に打つ絵文字かな

浜口 佳春

●砂

〔特選〕

夏の霧展望喫茶の砂時計

増田信子

頭に展望がついていて、普段は眺めがよいはずなのに、霧に視界は閉ざされている。太陽による時間の移ろいもはつきりしない。身

辺にある砂時計という、ごく限られた時しか
計らないものが、妙に親しい。

〔佳作〕

満月の砂々と踏み首夏の島

河合富美枝

雨上がり窪に砂まぐ一輪車

加藤 政男

南国や夫と集める星の砂

佐藤 まり

●自由題

〔特選〕

子燕の育つ老舗の屋台骨

蘭田 郁子

代々守り続けてきた老舗に、これも親から
子に受け継いで、燕がやってくる。子燕は育
ち果立って、来年もまた帰ってくるに違いな
い。屋台骨はしっかりとっており、燕も頼りき
っておれるのである。

〔佳作〕

長電話秋刀魚じりじり焼けており

四方 遼

亡き人の糸朽ち初めし白緋

小林 恵美

夏の朝もつ叱られている子かな

寺下 忠至



浄土誌上句会のお知らせ

題

③季語ではありません

板自由題 (活用可)

参加作品 編集部選

友

- | | |
|----------------|-------|
| 茄子もぎに来よと友の電話かな | 金谷 友江 |
| 友の訃を告ぐる電話や鉦叩 | 中島富士子 |
| クラス会変らぬ友のあの仕草 | 横井 龍行 |
| 旧友の定年知りて秋深む | 大場 清 |
| 良き友も補聴器はめて月涼し | 山本美代子 |
| 夏帽子似合の友を見なおして | 今井 恵子 |

砂

- | | |
|-----------------|-------|
| 砂の上素足でいそぎ海に入る | 今井 恵子 |
| 銀砂降る夏の夜空の星座かな | 山本美代子 |
| 玉砂利のひとつひとつに残暑あり | 大場 清 |
| 鳴き砂を踵に鳴かせ休暇果つ | 片桐てい女 |
| あきり取り明日の味噌汁砂をぬく | 横井 龍行 |
| 秋暮るる砂絵にかくす文字一字 | 中島富士子 |
| 夏果つや波が崩して砂の塔 | 金谷 友江 |

締切・十月二十日
発表・『浄土』二〇〇三年十一月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)
応募方法

- いずれの題とも数の制限はありません。
- 特選各1名・佳作各3名
- 葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0001 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

自由題

- | | |
|----------------|-------|
| 薄絹をまとうて淡き盆の月 | 中島 一子 |
| 宇治からの雅びの一壺新茶汲む | 河合富美枝 |
| 連峰の一峰光る稲の花 | 中島富士子 |
| コスモスや術後の母の試歩の杖 | 片桐てい女 |
| 湧き水のお茶を頂く古刹かな | 島崎 好子 |

さっちゃんねネ

4かい目

かまち♡おしろ



編集後記

読経に眠気もおす十夜哉

岱潤

先日親戚の葬儀があり列席した。

御導師は浄土真宗の高名なる僧侶であつた。浄土真宗では当然のことのようだが、お経よりも長い法話があつた。お通夜では二十五分足らずで終わつてしまつたお経のあと、遺族はお焼香の挨拶をしなごらの法話となつた。しかし内容は法話と呼べるものではなかつた。その大部分が亡くなつた方のご主人の思い出話であり、亡くなつた方の話はお寿司をよく持つてきてくれたことだけであつた。法話をするにはすばらしいことであるので、これ以上内容については不問に付したい。しかし、浄土真宗の葬儀式は私には納得がいかなかつた。通夜・葬儀で阿弥陀

経を読むことがなく、正信偈和讃（親鸞聖人作）で終始し、一度でさえ法名を詠むこともなさなかつた。「私たち浄土真宗では僧侶が供養するなどという言葉はなく、生きた人間に供養などできるはずがない」と言い、西方極楽浄土も夢物語、おとぎ話の世界だと言ひ切つた。そして阿弥陀仏は、永遠なる釈尊を追い求める願望だともおつしやつた。この僧は極端な僧であつたのかもしれない。しかし現在の浄土真宗にそうした考え方があつたことは確かであろう。私はむしろこうした僧侶自身が、何か科学信仰にとりつかれた人間に見えてし

ようがなかつた。

（長）

雑誌『浄土』を支えて下さっている方々

巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・円光寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
塚田弘導(平塚・晴雲寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村真道(仙台・愚鈍院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
真野龍海(芝・天光院)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)

敬称略・五十音順

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

浄土

六十九巻十月号 頒価六百元

年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十五年九月二十日

発行 平成十五年十月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三三二五七八六九四七

FAX〇三三二五七八七〇三六

振替〇〇二八〇・八・八二八七

編集顧問

大室了皓

編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

佐山哲郎

村田洋一



昭和33年12月号



昭和34年1月号



昭和34年2月号



昭和34年3月号



昭和34年4月号



昭和34年5月号



昭和34年6月号



昭和34年7月号



昭和34年8月号



昭和34年9月号



昭和34年10月号



昭和34年11月号



昭和34年12月号



昭和35年1月号



昭和35年2月号



昭和35年3月号

法然上人鑽仰会の

本



※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法話抄』
1,000円



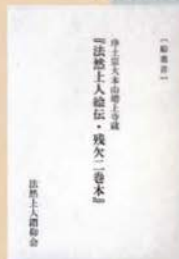
『ブツダ
知れば知るほど』
1,000円



月刊『浄土』
バックナンバー



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット) 800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話／03-3578-6947
FAX／03-3578-7036